

忌日・年回忌の
香語と法話集

1 一月(二)

〔二先〕

歳旦令辰正月筵

さいたん さいたん さいたん さいたん さいたん
れいしん さいたん しょうがつ せん

相迎忌景夢中遷

あいむか さいけい ちゅう せん
きけい むちゅう うつ

焼香礼拝菩提念

しょうこうらいはい ぼだい ねん
しょうこうらいはい ぼだい ねん

好是各人為善縁

よしこれ 子孫(各人)の善縁と為ることを
しそん(かくじん)のぜんえんとな

山門(家門) 今月此の日、「こ」 靈位ご 「ご」 靈位ご 「ご」 忌の辰しんに相値あいおうて、

謹つしんで香華灯燭(湯菓茶珍膳)を供え、供養を伸のぶ。

集つむる所の功德は、覺かく靈れい(淑靈しゆくれい)を資助しじよし、報地ほうちを莊嚴しょうげんす。

正しょう与よ麼もの時、如在じよざいの供養、何を以もつてか詮あきつかにせん。

(一字関)

風奏孝慈和合徳

かせ かな こんじ わごう とく
かせ かな こんじ わごう とく

存亡不隔古今天

そんもうへだ こん せん
そんもうへだ こん せん

新年を迎え、本日はご当家の御尊父(御母堂、御祖父、御祖母)○○様こと

「ご」 靈位の○○忌にあたり、皆様と一緒に至心に法供養を相勤あいめました。

故人の在りし日のおもかけを偲おもぶとき、

月日は夢のように過ぎ去ると感じられたことでしょう。

思えば、人生は山あり谷あり、また喜びあれば悲しみあります。

今日この日、心しずかに来こし方かたをかえりみて、

故人の菩提を念ずるとともに、亡き方(々)との縁を深く想い、

今年一年、正しく円満な日暮らしを送られますよう願うものです。

さて、法語の終わりに詠み上げた句は、次のような意味であります。

子は親を大切にし、親は子を慈しむことを孝慈こうじといい、

今も昔も変わりなく、家族が持っている親愛の情です。

そして、この孝慈和合の徳は、たとえ生と死を隔てても変わることがないのです。

「父と母に孝養をつくし、妻と子を手助けやしない、濁りなき生業にしたがう、これを最上の吉祥となす」(大吉祥経)

2 一月(二)

〔十一真〕

北風凜烈大寒辰

北風凜烈たり大寒の辰ほくふうりんれつ だいかん しん

又値温容昔日人

又た値う温容昔日の人また あ おんようせきじつ ひと

不信尋看安楽境

信じざれば尋ねて看よ安楽の境しん いたずら みる あんらく きやう

妙香奉献菩提春

妙香献じ奉る 菩提の春みやうこうけん まつ ぼだい はる

山門(家門) 今月此の日、「霊位」 「忌の辰」に相値うて、

謹んで香華灯燭(湯菓茶珍膳)を備え、供養を伸ぶ。

集むる所の功德は、覚霊を資助し、報地を莊嚴す。

正与麼の時、菩提の月円かに照らし、莞爾微笑底の消息、

如何が指陳せん。

(一字関)

山遠水長□□里

山遠く水長し □□の里(地名) やまとお みずなが

日於東上又西淪

日は東より上って 又た西に淪むひ ひんがし のぼ またにし しず

新年を迎え、寒気きびしく北風吹き抜ける大寒の辰、

本日ご当家には、故○○○○様こと「霊位」 「忌を迎え、

つつしんで追善供養の儀を相勤めました。

その功德を回らして、霊位が御仏の世界にあって、

安らかで円満であるよう助けまいらせ、

果報の地がますます清らかなものであるよう念じて、

右の法語をお焼香に添えてお唱えしました。

さて、覚霊が円満なさとの境地にあって、にっこりと微笑む様子を表せば、

きつとそれは、次のような、いつもと変わらぬ風景であります。

山々は遠くに連なり、川は静かに流れゆく○○(地名)の里。

太陽はいつも東より上り また西にしずむ。

そのように、あるがままのいのちを

仏とともに 生きておられるのです。

3 二月(二)

〔二先〕

余寒難去早春天

余寒去り難き 早春の天

此日迎來追善筵

この日 迎え来る追善の筵

歲月如流俄過去

歲月は流るるが如く 俄に過ぎ去るも

生前行跡永相伝

生前の行跡 永く相伝えん

茲に惟れば○○家、本日「 靈位」 「 忌法要に相値り、

齋を当山に設け、老衲に追善の仏事を修せんことを請う。

依つて、謹んで「 』を誦し、追善の法供養を嚴修す。

集むる所の功德は覺靈を資助し、報地を莊嚴する者なり。

正当即今、応供底の消息、如何が言詮に亘らん。

此香信手炉薫去 この香 手に信せて炉に薫じ去れば

昔日温顔尚宛然 昔日の温顔 尚お宛然たり

余寒なお去り難き早春の候、本日、ご当家には、故○○○○様こと

「 靈位の 「 忌を迎え、

親族一同相集い、懇ろに追善法要の儀を営まれました。

「追善の筵」の筵は、席のことで、読経・聞法の席に着くことを意味します。

この法筵に降臨されて、○○(居士・大姉)靈位もさぞかしお悦びのことと存じます。

歲月は川の流れのように、止まることなく過ぎ去るのみですが、

今日この日、心静かに故人の生前の行跡を想い、

子孫に永く伝えてゆかれますよう念じます。

さて、ここに靈位の冥福を祈る、その想いが、御魂に正しく感受され、

供養に込められる様子は、次のようでありましょう。

法筵に集う人々が、亡き人の冥福を祈って、焼香するとき、

ひとりひとりの心の中に、在りし日の穏やかなお顔は、

そっくりそのまま蘇るのです。

4 二月(二)

〔十一真〕

残寒二月涅槃辰

残寒二月 涅槃の辰

此日正当供養伸

この日正当 供養を伸ぶ

□□生涯多福德

(戒名) □□の生涯 福德多し

慇懃供養寂光春

慇懃に供養せん 寂光の春

茲に惟れば、家門本日「 靈位」「 忌法要を相い迎え、

功德法会を修し、追善の香一炷を焼いて、報地を莊嚴するものなり。

正午麈の時、「居士／信士／大姉／信女等」、菩提を増進する底の一句、

如何が指陳せん。

(一字関)

感応道交高着眼

感応道交 高く眼を着けよ

寒梅冒雪発芳唇

寒梅 雪を冒いで芳唇を發く

春は名のみ寒い日が続いていますが、

本日、ご当家には、御尊父(御母堂、御祖父、御祖母)○○様こと

「 靈位の○○忌を迎え、

有縁の人々相集い、懇ろに追善法要の儀をお勤めされました。

この二月十五日は、お釈迦さまがご入滅された日にあたります。

お釈迦さまは、沙羅双樹の下、八十年のご生涯を終えられる時、

「世は皆無常なり、会うものは必ず離るることあり。憂悩を懐くことなかれ。」

と最後の説法をなされ、「勤めて精進し、智慧のひかりによって、もろもろの煩惱の

闇を滅せよ」と、弟子たちを励まされました。

よって今日の法要は、お釈迦さまと縁の深いものといえましょう。

さて仏土に赴かれた方との心の交信は、どのようなものかといえ、

雪の降り積む寒中にも花を咲かせる、梅一輪の暖かさのようであり、

毎年、梅の花が咲く頃、尊霊はその香りと共に当家に帰ってこられるのです。